中国同盟会

清王朝打倒を目指す革命団体で、1905年に東京で結成されました。孫文の興中会、黄興の華興会、章炳麟の光復会などの革命団体が集まって結成されたもので、日本への留学生を中心として、知識人、会党、新軍兵士、華僑などが参加しました。

興中会

孫文
(1866～1925)

華興会

黄興
(1874～1916)

光復会

章炳麟
(1869～1936)

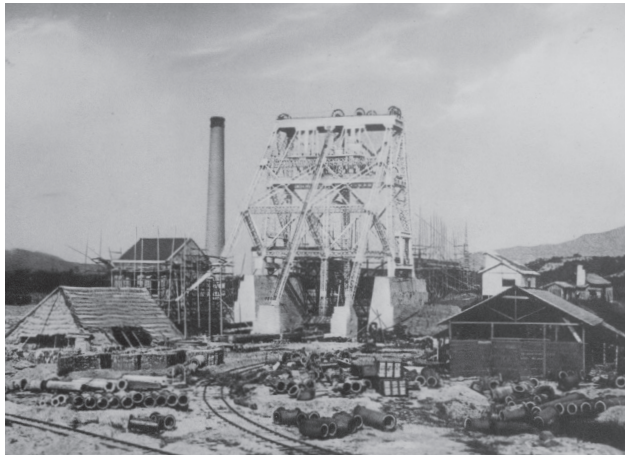
中国の南部・湖南省の出身。1901年に留学生として来日し、革命を志す同志たちと積極的に交流しました。1903年に秘密結社・華興会を組織し、その総理となりました。

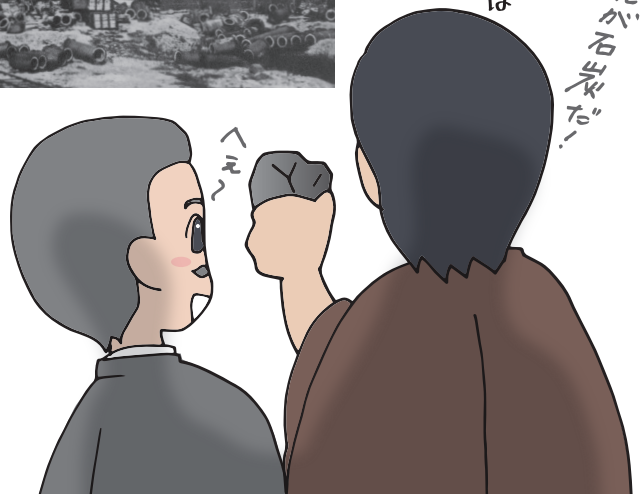
革命運動を進める中で滔天の「三十三年之夢」などをきっかけとして孫文の存在を知り、1905年にともに中国同盟会を組織、革命蜂起の総指揮をとるなどの役割を果たしました。

滔天とは個人的にも深く付き合い、息子の黄一欧を滔天家に預けました。黄興の記した扁額『達観』は宮崎家と黄興との交流を表す一品です。

翌一九一二年一月一日、孫文を臨時大総統とする中華民国が南京に成立しました

その後、大総統の座を退き「全国鉄路総弁」となった孫文は中国工業の近代化を推し進めるための視察として再び日本へ足を運んだのです





中国の英雄として日本各地で歓迎された孫文の傍らには滔天もいました